ブログ24　宇多田ヒカルと村上春樹の意外な接点！？

こんにちは高橋です。

今日は村上春樹の引用から始めたいと思います。

彼が、学生時代レコード屋でアルバイトをしていたときにたまたま会った

「ある有名人」について語っている部分です。

「彼女はマネージャーもつれずに一人でふらっと僕の働いているレコード屋に入ってきて、すごくすまなそうなかんじで「あの、売れてます？」とニコッと笑って僕にたずねた。とても感じの良い笑顔だったけれど、僕にはなんのことなのかよくわからなかったので、奥に行って店長をつれてきた。

「あ、調子いいですよお」と店長が言うと、彼女はまたニコッと笑って「よろしくお願いしますね」と言って、新宿の夜の雑踏の中に消えていった」

(※村上朝日堂より)

村上春樹と言えば、若いころ、日本人の固有名詞を極力ださない

作家として知られていたと思います。

特に、作家に関して顕著で、小説の中で三島由紀夫、対談で大江健三郎、エッセイで吉行淳之介と嵐山光三郎の名前を挙げたくらいではないでしょうか。

元々興味がない、ということはあると思いますが、そういう傾向は芸能人

に関しても共通しています。

趣味の音楽では、これでもかと固有名詞を出すのに比べて

日本人の名前はほとんど彼の文章の中で見かけません。

そんな、村上春樹の文章のなかで、私が知るかぎり

めずらしく「有名人」に触れた文章が存在します。

それが、上に引用した文章です。

ちなみに引用したエッセイのタイトルは「僕の出会った有名人２」

です。

(このエッセイの続き、「僕の出会った有名人３」は「吉行淳之介」でこれもすごく面白いエッセイです)。

この「有名人」、あなたは誰だか、わかりますか？

このエッセイが入った、本が出版されたのは1984年で

元々「アルバイトニュース」に掲載されたエッセイを本にまとめて刊行したものと

あります。

つまり、文章自体はもう少し前に書かれたものですね。

村上春樹の学生時代というと●年くらいでしょうか。

このころ活躍していた「有名人」で、エッセイのなかでは

「ヒット曲をたてつづけに出し、ひとつの時代を画したスーパースターである」

とその人を指して形容しています。

ヒントはタイトルに入れた宇多田ヒカルになりますが、わかりますか？

これは、宇多田ヒカルのお母さん

「藤圭子」

について書かれた文章になります。

そうですね。

残念ながら●年に自殺してしまった藤圭子さんです。

私は訃報に触れた当日、たまたま新宿にいて

頭に浮かんだのがこの村上春樹のこのエッセイでした。

引用した文章にうしろがあるので続けてみたいと思います。

「そんなわけで僕はまるで演歌は聴かないけれど、今に至るまで藤圭子という人のことをとても感じの良い人だと思っている。ただ、この人は自分が有名人であることに一生なじむことができないんじゃないかなという印象を、その時僕は持った」

優れた作家の洞察は千里の道をも通すという感じでしょうか。

ちなみに、村上春樹が藤圭子と「会った」レコード屋も「新宿にあった」そうです。

そして、なくなったのも新宿ですね。

藤圭子がどういうヒット曲を連発していたのか全然知りませんし

テレビで見た、という記憶も時代が違うのでありません。

宇多田ヒカルがデビューしてからは彼女のお母さんとしての認識しかありませんでした。

縁があるとすれば訃報に触れた当日に新宿にいたという

ただそれだけの「縁」ですが、この優れた作家の洞察を少しだけ恐ろしく思ったのを

よく覚えています。

たまたま新宿に行く用事があり

ふと頭によぎったので、随分村上春樹の文章を借りて

英語とは関係ないことを話してしまいました。

「宇多田ヒカル」の名前を出して随分大風呂敷をひろげてしまいましたね。

明日は英語の話に戻りますのでお楽しみに！

●追伸

一応、英語に関するブログなので

村上春樹が、英語に関して語っている文章も引用しておきたいと思います。

「僕はけっこう翻訳の仕事もしているし(ああ、実に十冊も翻訳書を出しているのだ)、ここのところずっと年の大半は外国暮らしをしているから、会話のほうもさぞや堪能なんだろうと世間で思われがちなのだけれど、そんなことはなくて、恥ずかしながらまったく苦手である。何か用事があって外国人と会って英語ではなさなくてはならないような時には、朝からなんとなく胃が重くて仕方ない。」

(※「村上朝日堂はいほー」)

私は、このエッセイを、仕事で外国人に接するようになってから

読み返して随分救われた気分になったのを覚えています。

ツーソン大学で日本文学の講義を持った人でも

こうなら、当時の私はもっとできなくて当然ですね。

このエッセイ自体のタイトルは「●」で

英語に関する村上春樹の考え方が披露されています。

面白いエッセイなので、ぜひ手にとってみてください。

今日はこのあたりで。